

浦島新説

木村 建一

浦島太郎の物語には浦島伝説と称して昔から多くの伝説がある。ここではわが新説を披露してみたい。

むかしむかし 浦島は
助けた亀に連れられて
竜宮城へ来てみれば
絵にも描けない美しさ

乙姫さまのご馳走に
鯛や平目の舞踊り
ただ珍しくおもしろく
月日のたつのも 夢のうち

遊びにあきて 気がついて
おいとま乞いも そこそこに
帰ってからの楽しみは
土産にもらった 玉手箱

帰りてみれば こはいかに
元いた家も 村もなく
道にゆきかう ひとびとは
顔も知らない ものばかり

心細さに 蓋とれば
空けてくやしき 玉手箱
中からぱっと 白煙
たちまち太郎はお爺さん

元はラブストーリー

誰でも知っているこの小学唱歌、考えてみれば不思議な魅力を持っている。あるいは魔力といえるかもしれない。それもその筈、この話は遠く日本書紀や風土記などにもある浦島伝説として数多くの人たちに親しまれてきた官能物語であったという。

古代文学・伝承文学の研究者で、『浦島太郎の文学史—恋愛小説の発生—』（五柳書院、1989年11月）の著者、三浦佑之立正大学教授によると、それまで伝承されていた浦島伝説を明治期に巖谷小波（いわやさざなみ、明治、大正期の作家、児童文学者）が恩返しに主眼を置いた子供向けの読み物に改作し、そのダイジェスト版が明治43年から35年間、国定教科書の教材になり定着したという。約束を破ってはいけない、という教訓なども含めて、以来広く一般に親しまれるようになった。その意味で、巖谷小波の功績は高く評価される。

また、浦島伝説に関する文学的研究も近年盛んになっている。代表的なものは、林晃平著「浦島伝説の研究」（おうふう、2002年1月 ¥12,000＋税）であろう。これは500ページにも及ぶ大著で、簡単に入手することはできないが、その内容の概略は三浦佑之氏の『口承文藝研究』第25号、（日本口承文藝學會編 2002年3月31日発行）に掲載された書評に興味深く説明されている。これはインターネットで検索して読むことができる。それによると、著者林氏は苫小牧駒澤大学 国際文化学科の教授で20年以上浦島伝説の研究を続けているという。また、変わったところでは、上田女子短期大学の平成4年の卒業論文で佳作となった井原七緒子氏の「浦島伝説の起源について」（学海 9, 41-50, 1993-03、上田女子短期大学）がある。これも文学的考証を深く展開した優れた作品と見る。インターネットでダウンロードできる。

他にも多くのお伽話はあるが、この浦島太郎の話は中でも最高傑作といってもいいであろう。「浦島太郎」はお伽話どころか文学的価値の高い伝説であるといわれている。とにかく伝説と言われるものには、興味ある事実があつて、

それを誇張したり、尾鰭をつけて、面白おかしく仕立てられたものと言えるから、その源流を探ってみることも面白い。例えば、天の岩戸の話は、日食であったことに違いないと思うし、大江山の鬼は大男たちの盗賊であったことは想像に難くない。三保の松原には羽衣の松と称して、かぐや姫が月に帰る前にその松の枝に掛けたという言い伝えがある。多分これはかぐや姫が悪いことをされた男に愛想をつかして身を投げたのではないか。かぐや姫も桃太郎も捨て子だったのではないか。

浦島伝説の歴史

現存文献で浦島子の登場する最古の事例は、『日本書紀』「雄略二十二年条」で、蓬莱山へ行ったという発端部分だけが記載されており、その内容は表現も構成も神仙思想を元に古代中国で流行した神仙伝奇小説に似ており、この物語が不老不死への願望から生じた作品だったと考えられている。

『万葉集』巻九の高橋虫麻呂作の長歌（歌番号 1740）に「詠水江浦嶋子一首」として、浦島太郎の原型というべき以下の内容が歌われているという。

“水の江の浦島の子が 7 日ほど鯛や鰹を釣り帰って来ると、海と陸の境で海神（わたつみ）の娘（亀姫）と出会った。二人は語らいて結婚し、常世にある海神の宮で暮らすこととなる。3 年ほど暮らし、父母にこの事を知らせたいと海神の娘に言ったところ「これを開くな」と篋^{注1}（玉手箱のこと）を渡され、水江に帰ってきた。海神の宮で過ごした 3 年の間に家や里は無くなり、見る影もなくなっていた。箱を開ければ元の家などが戻ると思い開けたところ常世との間に白い雲がわき起こり、浦島の子は白髪の老人の様になり、ついには息絶えてしまった。”

『丹後国風土記』逸文^{注2}にある「筒川嶋子 水江浦嶋子」（釋日本紀 卷十二）が浦島伝説の原型とされる。主人公は風流な男である浦島子と、神仙世界の美女であり、その二人の恋が官能的

に描かれて異界（蓬莱山）と人間界との 3 年対 300 年という時間観念を鮮明に持つ。その語り口は、古代にあっては非常に真新しい思想と表現であり、神婚神話や海幸山幸神話などとはまったく異質であり、結末が老や死ではなく肉体が地上から消え去るといった神仙的な尸解譚^{注3}になっているのもそのためであるという。なお、この記事は 7 世紀後半の学者官僚であった伊預部馬養（いよべのうまかい）が書いた作品を本にしたものとされる。

平安時代になると浦島物語の舞台の丹後地方で、浦島明神という神社が浦島子を祀り人々の信仰を受け、中央の浦島物語と呼応する形で出てきたものと考えられる。以降も漢文伝として、10 世紀初頭の『続浦島子伝記』、11 世紀後半から 13 世紀初期の「浦島子伝」などに書き継がれてきた。また、三浦佑之氏によれば、12 世紀以降になると、和歌童蒙抄などの歌論書に浦島物語が登場し、仮名で書かれ宮廷や貴族達の間には浦島物語が広く浸透したという。

「浦島太郎」として現在伝わる話の型が定まったのは、室町時代に成立した短編物語『御伽草子』によるとされる。その後は昔話として様々な媒体で流通することになる。亀の恩返し（報恩）と言うモチーフになったのも『御伽草子』以降のことで、乙姫、竜宮城、玉手箱が登場するのも中世であり、『御伽草子』の出現は浦島物語にとって大きな変換点であったとされる。

“太郎は竜宮城で姫と 3 年暮らしたが、残してきた両親が心配になり帰りたいと申し出た。姫は自分は実は太郎に助けられた亀であったことを明かし、玉手箱を手渡した。太郎は元住んでいた浜にたどり着くが、村は消え果てていた。ある一軒家で浦島何某の事を尋ねると、近くにあった古い塚がその太郎と両親の墓だと教えられる。絶望した太郎は玉手箱を開け、三筋の煙が立ち昇り太郎は鶴になり飛び去った。”

鶴亀コンビはここから出たともいわれる。

中世になると、『御伽草子』の「浦島太郎」は、絵巻・能・狂言の題材になり、読者・観客

を得て大衆化し、江戸時代に受け継がれた。

以上の記述はウィキペディア「浦島太郎」および「浦島伝説」から採録した。

こうした物語に共通するのは、そこに何等かの教訓が潜んでいることだろう。故郷に残してきた両親のことも忘れて、長い間遊びほうけていた太郎はよくない人、というレッテルを貼られてしまった。また、乙姫様から絶対に開けてはなりません、と言われていた玉手箱を開けてしまったために白髪のお爺さんになるという罰を受けた太郎は、約束を破った人であった。こういう話は、子供心に忘れがたい教訓としていつまでも残る。そして、文部省の国定教科書では、実は太郎は乙姫さまと恋愛結婚して子供まで生んだことなどは割愛したことになる。小学唱歌では、郷里の父母を思って帰りたいと乙姫を口説いた結果、玉手箱をもらったときに絶対に開けてはならぬと言われてたくだりもない。

浦島伝説の七不思議

さて、浦島太郎のお伽話にはいくつかの不思議な謎がある。以下に浦島伝説の七不思議をまとめてみた。

第一に、太郎が住んでいた海辺の村は何処だったのだろうか。

第二に、海辺で子供たちが虐めていた亀を助けてあげた後で、亀がそのお礼に背中に乗せて竜宮城へ連れて行ったというが、そんなことは到底考えられない。

第三に、竜宮城みたいな城が海底にあったのか。あったとしたら何処にあったのだろうか。

第四に、太郎は乙姫様のおもてなしがあったとしても、なぜ長い間竜宮城に滞在したのか。両親のことを思い出さなかったのか。

第五に、帰りはどんな風にして帰ったのか。

第六に、乙姫様はお土産に玉手箱を太郎に渡したが、絶対に開けてはならないと言ったのは何故だろうか。

第七に、太郎が玉手箱を開けたときに、白い煙が立ちのぼって、途端に太郎が白髪になって

しまったのは何故だろうか。この大団円の謎はインターネットにはどうしても見当たらない。この際何とかして解き明かしたい。これらの謎に対する解釈については、大昔からいろいろな説がある。一つ一つ検討してみよう。

第一の謎：まず浦島太郎という人物はどこかの浜辺にいたかだが、これについては諸説紛々で、各地に浦島太郎にまつわる記念碑や銅像などがある。



典型的な日本の漁村の浜辺：甌島布ノ浦

香川県の丸亀に近い三豊市の浦島神社には亀の背中に乗った太郎の銅像がある。近くの荘内半島一帯には、太郎が生まれたという生里、箱から出た煙がかかった紫雲出山ほかたくさん浦島伝説に基づく地名が点在していて、太郎が助けた亀が祀られている亀戎社もあるという。



香川県三豊市の浦島太郎像

横浜市神奈川区には、浦島にゆかりの観福寿寺があったが、明治時代に焼失し、乙姫が枝に光を照らした松も大正時代に枯死したが、慶運寺には聖観世音菩薩像が現在も残るといふ。

浦島伝説の中では最も古いとされる京都府与謝郡伊根町の浦嶋神社は、『丹後国風土記』逸文ゆかりの地域にあるが、社伝では天長2年(825年)に創建されたとのこと。丹後半島にはこのほかにも浦島伝説に基づく神社があるといふ。

長野県上松町の臨川寺にある景勝寢覚の床は竜宮城から戻った浦島太郎が玉手箱を開けた場所といわれ、中央の岩の上には浦島堂が建つ。臨川寺は、浦島太郎が使っていたとされる釣竿を所蔵する。

愛知県武豊町の知里付神社には浦島太郎が竜宮城から持ち帰ったといわれる玉手箱が所蔵されている(非公開)といふ。また、真楽寺の境内には浦島太郎を背負った亀のものとされる墓がある。

長崎の聖寿山崇福寺の竜宮門には訪れたことがあるが、多分竜宮城の門はこんな形をしていたらうといふ想像から造られたものであろう。1673年(寛文13)に創建されたが、現在の三門は、游龍彦十郎・鄭幹輔の発願によって1849年(嘉永2)に再建されたもので、日本人棟梁大串五良平の手によるとされる。航海安全の祈願や先祖供養を主としており海の神様である媽祖を祀る「媽祖堂(まそどう)」をもつことであつたといふ。



崇福寺の竜宮門

このようにそれぞれの土地で、浦島太郎が住んでいたのはここだ、という信仰にも似た伝説を誇りにしているから面白い。

なお、これらの説明および写真はウィキペディアから採録した。

これだけ昔から有名であつた浦島太郎の話は、言い伝えて各地に伝播したために、本当は何処だかわからないのをいいことに勝手に名乗りをあげたのだらうと思ふ。

第二の謎：『お伽草子』によると、“丹後の国に浦島という者がおり、その息子で、浦島太郎といふ、年の頃24、5の男がいた。太郎は漁師をして両親を養っていたが、ある日、釣りに出かけたところ、亀がかかったが、「亀は万年と言うのにここで殺してしまうのはかわいそうだ。恩を忘れるなよ」と逃がしてやった。数日後、一人の女性が舟で浜に漕ぎ寄せて自分はやんごとなき方の使いとして太郎を迎えに来た。姫が亀を逃がしてくれた礼をしたい旨を伝え、太郎はその女人と舟に乗り大きな宮殿に迎えられる。”

また、太郎が助けた亀は乙姫の化身だといふ説もある。ありうる話としては、そのとき通りかかった舟に乗っていた彼女が、亀が海中に潜ってしまったって溺れていた太郎を救い上げたのか、太郎が自分の舟で乙姫の言うとおりにして行ったのか、といふところだらう。

第三の謎：海底深く沈んでいる琉球王国の城跡も大昔には地上にあつて、そこに竜宮城は実在していたかもしれない。

遙かな海の向こうの海底深く、ニライカナイと呼ばれる常世の国があり、神はそこから生まれ、琉球にやってきて、人々に恵みをもたらすのだと琉球王国の人々は信じていた。ニライカナイとは沖縄の言葉で「楽園」という意味。琉球(リュウキュウ)～竜宮(リュウグウ)と発音は似ている。

ところが1986年に与那国島の「海底遺跡」が発見され、その第1発見者は与那国島で初の

ダイビングショップ「サーウェス・ヨナグニ」を設立した新嵩 喜八郎氏とされている。



与那国島海底遺跡（写真は新嵩喜八郎氏）
海洋地質学者の琉球大学名誉教授、木村 政昭博士は与那国島付近の海底地形に関心を持ち、古代または中世の遺跡であると主張している。木村教授によれば、「邪馬台国」は北谷海底遺跡にあったとされ、「竜宮城」「ニライカナイ」は、水没した北谷海底遺跡ではないとしている。



北谷海底遺跡の平面図

沖縄近海の珊瑚礁は美しい熱帯魚で有名などころだから、鯛や平目でなくても舞い踊りする綺麗な魚の宝庫であるとするなら、浦島太郎の漁村はそこからそんなに遠くないところではないかとも想像される。



沖縄舞踊

第四の謎： 文献によると、竜宮城の3ヶ月は地上の3年、あるいは竜宮城の3年は地上の30

年、竜宮城の30年は地上の3千年というふうに誇張される。心理学の研究者によると、素晴らしい境遇に滞在していた期間は、実際にはその何倍もの時間が過ぎるということは、現実の世界でもありうるという。

今でも面白い本などを読んでいて、電車乗り過ごす御仁が多い。降りるべき駅は過ぎ、気がついてみるとおやと思う駅に来てしまっている、ということがあつた。つまり脳内時間と現実の時間とのずれがありうるということで、そのずれは数分間なのかわからないが、お伽話では何倍にもなってしまう。

そうしてみると、太郎が玉手箱を開けなくても白髪の爺さんになっていたと推定してみると、亀を助けたのは25歳ごろで、竜宮城での滞在期間は3年で、帰ってきたのは約30年後というのが大体妥当なところではないかと思われる。

諸説でも不思議なことに3という数字がいつも出てくる。3年でも両親のことが気になったとしても、そんな長い間乙姫様と一緒にいるほうが楽しい、ということがありうるだろう。伝説でも、太郎は乙姫様と結婚して、子供をも設けたという説があるが、現代ならなおさらそんなに不思議とは言えないだろう。

第五の謎： どんな風にして帰ってきたのかはさっぱりわからない。乙姫様には強く引き留められたのは当然で、また帰ってきてくることを約束したくらいだから、送ってくれないだろう。現実に立ち返ってみれば、舟を自分で手配して帰ってきたとみればおかしくない。

しかし、30年も経っていたとすると、自分が住んでいた浜辺に帰れたかどうかは疑問で、似たような浜辺はいくらでもあるから、違う浜辺に辿り着いたのかもしれない。

場所がわかれば交通手段は舟しかないので、この疑問はどうでもいいとしておく。

第六の謎： 太郎が望郷の念にかられて帰郷を願うが、乙姫はどうしても戻ってきてもらい

たいために、一つのタブーを課して帰郷の許可を与えた。そのタブーこそが玉手箱を開けてはならないということであった。もし開けたら夫婦は絶縁状態になることを太郎も承知していた。(前記井原奈緒子氏による。)

第七の謎：いよいよ大団円。不思議なのは、玉手箱から白い煙が立ちのぼって、それが太郎の黒髪を真っ白にしてしまったという話はどう考えても納得がいかない。そんな薬や化学薬品があるわけがない。

そこで、私の仮説は、玉手箱の中にあったのは鏡だったということ!!!つまり実際は年老いていたのに竜宮城では自分の顔を見たことがなかったというわけだ。

このことは、インターネットを調べても出てこないの、わが新説としたい。これを周囲の人たちに言ってみると、成る程、という人が多く、中には矢鱈と感動する人もいる。

たしかに三種の神器の一つに八咫鏡があるし、いくつかの古代の鏡も発見されているので、鏡は竜宮城にはあったかもしれない。あるいは、乙姫は実は高貴なお方で、鏡を持っていたのであろう。それを戻ってくるかどうかわからない太郎に渡したということは、乙姫も強烈な愛の心を持っていたことの証しであろう。



古代の鏡の例(椿井大塚山古墳出土の三角縁獣文帯四神四獣鏡の複製(注4))

建築史では「家屋文鏡」がある。そこには古代の住居の立面がレリーフになっている。鏡というよりは、古代住居の形を知る縁として貴重

なものとなっている。後輩の池浩三氏がこの「家屋文鏡」をテーマとして学位論文にまとめた。その内公聴会がある日の教室会議のあとに開かれて、彼の説明を聴いたのを覚えている。後に彼は「家屋文鏡の世界」と題する書を出版した。また、自分のことを持ち出して恐縮だが、1982年に日本建築学会の論文賞を受賞したときの賞牌がこの「家屋文鏡」のレプリカだった。浦島との関係があることなどは知らなかったが、懐かしい思い出となった。なお、「家屋文鏡」のレプリカは建築会館2階の廊下に飾ってある。芸術品としても価値があると思う。

「家屋文鏡」はとても顔を映すものとは思われない。けれども文鏡というからには、磨けば映るものだろう。



家屋文鏡(注4)

まとめ

1. 「浦島太郎」物語の七不思議を呈示し、浦島伝説の元の実話に迫り、解明を試みた。
2. 玉手箱の中にあったのは鏡であった、という新説を述べた。
3. 浦島伝説は奥深いことを悟った。

〔注記〕

注1：篋(くしげ)ももとは化粧道具を入れるためのもの
注2：逸文(いつぶん) 原本が存在せず、他書に引用その他の形で残っている文章

注3：尸解譚(しかいたん) 仙術を心得た者が肉体を残して魂魄(こんぱく)だけ抜け出るといふ道家の術についての話

注4：ウィキペディアより (2010.10.14 記)